2022.03.13. 栄光のために死ぬ　Part2　Mac 牧師

おはようございます。JD 牧師の代講です。ここカルバリーチャペル・カネオへの、ライブ配信礼拝にようこそ。これは第二礼拝です。今朝の教えのパート 2 になります。聖書「ヨハネの福音書 2 章」をお開き下さい。27 節から始めます。聖書「ヨハネの福音書 2 章」をお開き下さい。27 節から始めます。もう一度、ヨハネの福音書です。可能であればご起立ください。今朝の聖書朗読をしましょう。その後、一緒に祈りを捧げたいと思います。ヨハネの福音書 12 章、27 節から神の御言葉をお読みします。

ヨハネ　12

27「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」

28 父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」

29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、「雷が鳴ったのだ」と言った。ほかの人々は、「御使いがあの方に話しかけたのだ」と言った。

30 イエスは答えられた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためです。

31 今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。

32 わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」

33 これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。

34 そこで、群衆はイエスに答えた。「私たちは律法によって、キリストはいつまでも生きると聞きましたが、あなたはどうして、人の子は上げられなければならないと言われるのですか。その人の子とはだれですか。」

ご一緒に祈りましょう。天のお父様。このメッセージを伝えられるのはあなただけです。私は壊れた器です。ここにいるすべての人々の手と心を強めてくださるよう祈ります。私たちはあなたの民です。このみことばを聞き、これによって生きる必要があります。主よ、あなたのご臨在と聖なる御言葉で私たちを祝福してください。イエス・キリストの力強い御名において、祈ります。アーメン。

ご着席ください。ちょっと失礼します。唇が乾いています。今日の第二礼拝の説教は、「栄光のために死ぬ 」というタイトルの第二部です。第一部では、ヨハネの福音書 12 章 20 節から 26 節までを学びました。そして、私たちは多くのことを発見しました。主がこれからなさろうとしている最大の出来事が、どのように起こるかを見ることができました。イエスは、栄光を受けると宣言され、私たちは、それに至るしるしを見ました。イエスは十字架が近いことを知っておられ、十字架が故に、本当に栄光を受けられるのです。その節で、イエスは短いけれども最も力強い例えを話されました。ご自分が死ぬことによって、何が生まれ、最終的に、イエスに従い、信じるすべての人にもたらされる益を話されたのです。何か基本的なメリットがあるわけではないんです。永遠の命こそが恩恵/益なのです。しかし、私たちは皆、自分に死なねばなりません。さあ、そこで…イエスは、来たるべき十字架に直面しておられます。完全に神でありながら、完全に人間であられ、完全な人間として、十字架に向き合うことになられるのです。それを考えてみてください。人間の姿で、イエスはすべての痛みを感じられるのです。本文の 27 節を取り上げてみましょう。御言葉をもう一度読みます。これはイエスが語っておられます。これはイエスが語っておられます。

「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。

いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」—27 節—
福音書の中で、唯一使徒ヨハネが、イエスのこの御言葉を取り上げています。他の福音書はすべて、ゲッセマネの園でイエスの魂が悲しみの状態にあるとき、本当の主の祈りをされた点を捉えています。イエスの魂が悲しみの状態にあるときです。しかし、ここでヨハネはこの御言葉を捉えこれには理由があると私は考えます。なぜなら、ここでヨハネは、イエスの神性に注目しているからです。それは、イエスの心が騒ぐということについてです。イエスが人間として直面する、神の裁きについてを言及しています。そのことについて考えてみましょう。イエスが、こうは仰っていないことに留意してください。
「何と言おうか。『父よ、私をユダヤ人から救ってください。父よ、私をピラトから救ってください。父よ、私をローマ人から救ってください。』」いいえ、そうではなく、イエスは、『父よ、この”時”からわたしをお救いください』と仰っています。御父とイエスは、初めからこの”時”をご存知なのです。これがイエスの目的であり、イエスがこの世に来られたのはこのためだったのです。既にそれをご存知でした。
イエスはそれを知っておられました。イエスは肉に宿った神であり、永遠のご存在です。またその当時、多くの十字架刑が行われていました。彼らは皆、人間に対するローマ人の益に仕え、宣言しました。彼らが支配し、それが彼らのしたことでした。人間がしたことなのです。しかし、神は今、この十字架刑という人間が作ったものを、神の神聖な目的のために使おうとしておられるのです。考えてみてください。それは、人間の思惑とは関係ありません。彼らはそう思っていましたが、そうではありません。神の思し召しであり、主権であり、完全なご支配です。そして私には、これはイエスが示される驚くべき神の謙遜の現れだと思います。考えてみてください。イエスは何が起こるか知っておられました。神の子で、神と一体であられるにも関わらず、父なる神の御怒りに直面することをいとわなかったのです。イエスは、そのことを初めから知っておられ、これから、肉体的な痛みを受けようとされていて、それに伴う霊的な痛みはもっと大きかったと思うのです。イエスは、父なる神から、引き離されようとしていたのです。この神からの分離が、イエスの魂を悲しませたと、私は考えます。他の誰も、そのようなことを言えません。生まれてきた人は皆、生まれたその時点で、既に神から切り離されています。神の人イエスは、人間の私たち一人ひとりに、神と和解する機会を提供するという、目的を果たそうとされているのです。聖書の中で、最も古い書、ヨブの時代からこの時まで、彼らはみな、贖い主を見ようとしました。彼らは、贖い主を通して、神と和解することを望んでいましたが、その栄光が、どのようにもたらされるかを理解している者は、ほとんどいませんでした。イエスの目的は、私たちが永遠の命を得るために、私たちのために死ぬことでした。そこで質問ですが、私たちの目的は何でしょうか？　これは重要な質問ですが、そのように尋ねる必要があります。これは荷が重い質問ですが、そのように尋ねる必要があります。
それについて考えるとき、質問そのものの幅を覆いつくすような、的を得た回答を始めることができるのです。私たちの目的は何でしょうか？　この目的は何かという質問に、勿論、御言葉に基づいて答えることができたら、次に、いつ、どこで、どのように、そして、なぜ、という問いを続けなければなりません。少なくとも私にとっては、主と共に歩むための助けとなります。私たちは皆、自分の目的を知る必要があるのではないでしょうか?　何世紀もの間、哲学者たちは人間の目的を見つけようとしましたが、人間はその問いに答えることができず、すべて失敗しています。イザヤ書 43 章 7 節に、次のように書かれています。お読みします。
イザヤ　43
7 わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造した。これを形造り、

また、これを造った。
7 わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造した。これを形造り、また、これを造った。
これはよく知られた箇所ですが、私たちの目的は何かという問いに対する答えはできるだけ狭い範囲に絞る必要があります。要するに、私たちの目的は神のご栄光のためです。（会衆：アーメン）ここに留まらねばなりません。それは、神のご栄光のためです。（会衆：アーメン）これは、私たちが何のために創られたのか、だけでなく、ある面なぜ創られたのか、でもありますが、これから祈りながら見ていくように、主要な理由ではありません。私たちは神を賛美するため生きているのでありそのために死ぬべきであるということには議論の余地はありません。このことを解っていると、その後のすべての質問に答えるのが非常に簡単になります。簡単過ぎます。考えてください。例えば、「私たちは、いつ神をほめ讃えるのか？」答えは、「私たちが最初に信じた瞬間から、永遠にです。」他に質問はありますか？　では次、「どこで神をほめ讃えるのか？」答え、「私たちはどこにいても、何をしていても、人生のあらゆる場面で神をほめ讃えるのです。」「神を、どうやって讃えるかについては？」答え、「神からの聖霊の御力によっ讃えるのです。」それしかないのです。他に方法はありません。主の栄光を見なければなりません。
「誇る者は主を誇れ（II コリ 10：17)」と書かれています。それは、真の生ける神からしか得られないのです。最後に、「なぜ私たちは神を讃えるのか？」答えは、「愛が故に。愛、それが理由です。」神からのみ与えられるアガペー（無条件）の愛だからです。キリストは、与える方であり、すべての人間の意志ある心によってそれが返って来るのを望んでおられます。神から離れたら、愛の完全な満しを経験することはできません。他のものは見せかけです。一日中 "愛 "と言っていても、神がいなければ、本当に、愛が何であるか分からないのです。それは不可能です。なぜなら、私たちがそれについて考えたなら…世論調査をしましょう。歩きまわって何人かの人に、「誰かを愛していますか？」と聞いてみれば、ほとんどの人が「はい」と答えるでしょう。もし誰もが誰かを愛しているのなら、なぜ世界には、これほど多くの憎しみがあるのでしょう？　それは、神からの愛ではない。それが理由です。神を欠いた空虚さが常に存在し、神の愛の真理で満たされなければ、この愛のない世界の虚偽で満たされることになるのです。この世は、私たちのことなど、どうでもよいのです。誰もが消耗品なのです。まったく意味が無いのです。彼らが誰であろうと、彼らの計画のために役立たなければ、あなたは終了です。これが話を元に戻します。この神への愛を持つことで、私たちは神に栄光を帰すという人生の目的をもたらされるのです。このことが、どう作用するか分かりますか？　これが問題のすべてです。私たちが、何のために創られたのか、それは、主のご栄光のためです。御言葉の 28 節を読みます。イエスは、この 28 節から話し始めておられます。
「父よ、御名の栄光を現してください。」すると、天から声が聞こえた。「わたしはすでに栄光を現したわたしは再び栄光を現そう。」
留意すべきは、27 節で、イエスがご自分の魂の騒ぎを語られた後、今や 28 節冒頭ではイエスが御父を呼び求めておられること。分かりますか？　ついて来ていますか？　魂が悩んだら、御父に呼び求める。それに注視することがとても重要です。これは短い祈りです。これが正にです。とても短いけれど、的を得ています。「父よ、御名の栄光を現してください。」その短いけれど鋭く的を得た祈りが終わると、神は彼に答えられた。神は、イエスが求めたものを本当に与えると答えられました。それは必ず実現します。この究極の出来事、つまり十字架刑が、すぐには行われませんでしたが、神はイエスに、「御名の栄光を

現す」と、知らせられたのです。それが起こるのです。決定事項です。それには理由があります。皆さんが私に尋ねるなら、その理由は、すべて神のご栄光のためだと信じます。皆さんが私に尋ねるなら、その理由は、すべて神のご栄光のためだと信じます。「父よ、御名の栄光を現してください。」との祈りについて、考えてみましょう。「父よ、御名の栄光を現してください。」との祈りについて、考えてみましょう。皆さん、ついて来てますか？　主の栄光のための祈りは、答えられます。JD 牧師が、いつもそう話しているのを思い出しますね。私たちの益であり、神のご栄光のためなら、決定事項です。多くの真理があります。ここでそれを見られます。決定事項なのです。また JD 牧師は、「最も強い人は、祈りの人」だとも言います。そこにも多くの真理があり、まったくその通りです。私は多くは話しませんが、JD 牧師は強靭な祈りの人です。私は、いくつかのものを見てきました。私は軽く考えてしまいがちですが、それは良くないことです。なぜなら、軽視すると、神のご栄光を奪ってしまうからです。「誰がそんなことを信じるんだ？」となりますからね。しかし、JD 牧師は祈りの人です。最近、家族が亡くなったので、本土東部に帰っていました。妻の叔父で、叔父というより、基本的に父親代わりでした。妻の父親は、彼女が 8 歳のときに亡くなっています。それで妻は、誰が追悼演説するかで少し不満だったんです。妻は、叔父を讃える役を、私にやってほしいと思っていました。私は、「そのことに口出すつもりはない、主が導かれるんだから。」と言ったのです。それで、妻はどうしたか？　彼女は、JD 牧師に話しに行くんですよ。ー(笑)ー　私が駐車場から中に入ると、JD 牧師がそこにいて、妻と話してました。私は、どうしたんだろうという感じです。そして JD は私を見て言いました。「よし、これから祈るぞ。君は、自分の光を輝かす準備をしなさい。」私は、「何のことですか？」JD 曰く「具体的に祈るつもりだよ。これが私の祈りだ。追悼演説する予定の人が病気になるよう祈る。死ぬのではなく、ただ病気になるように。...ー(笑)ー...そして、君が彼女の叔父さんのために話すんだ。」私は「何でもいいよ。」と思いました。ー(笑)ー
私は、その他の祈りについて考えました。私は考え始めました。「あ、いや、ちょっと待てよ。何かあるかもしれない。」出発の前日、電話がかかってきました。妻が電話口で叫んでるのですが、何を言っているのか、理解できませんでした。私は「家に帰るまで待て。」と言い、妻は「OK。」となりました。家に帰ると、妻がそのメールメッセージを見せました。こう書いてありました。「〇〇さんが病気になったので、ご主人が追悼演説できるかどうか、確認してください。」ー(笑)ー　コロナで。ー(笑)ー　死にはしませんでした。私はそのテキストメッセージを見て、「冗談だろ？」と思いました。それで、JD 牧師にメッセージしました。「あの～祈りが答えられました。」JD は、大量のスマイルマークを返信くれました。ー(笑)ー　いいですか、JD は祈りの人です。ですから、JD が戻ってきたら、祈りのリクエストを持って、建物の周りにお並び下さい。ー(笑)ー　私が言いたいのは、祈りはパワフルだということです。（会衆：アーメン）本当にそうなんです。ー拍手ー　主を褒めたたえます。主を褒めたたえます。ー拍手ー
すべてがうまくいき、妻の叔父は名誉で、私たちも祝福されました。でも私たちの魂が悩み、その試練に直面しようとしているとき、あるいはそれを経験しているとき、御父に祈り、御名の栄光を現すためにそれを求めるのがよいでしょう。その祈りは必ず聞かれます。そうすると主からはっきりとした御声を聞くことが期待できます。それが神の御言葉や、聖徒や、その他の方法を通してであれ、たぶんあの静かで小さな声です。御父を讃える祈りは必ず答えられる安心があります。具体的に分かります。イエスの宣教中に、神がこのように物理的に声を出して話されたという記録が、福音書に 3 つあります。最初のものは、イエスが洗礼を受けられたときで、神はこう語られました。
「わたしはこれを喜ぶ」（マタイ 3：17）

もう 1 つは、イエスの変容のときで、神がペテロ、ヤコブ、ヨハネを正された時。しかし、彼らはそれでもなお、主の栄光を見ていたのです。すばらしいことです。それはとても素晴らしい光景だったに違いありません。しかし、ここでは、神がイエスに直接語りかけているのです。また 28 節で、神がご自分の御名について話されたとき、「わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」と言われたことに注目してください。このことについて考えてみましょう。神は、どのような御名前のことを仰っているのでしょうか？　イエスの御名前について、話しておられるのです。これを補完する形で、いくつかの見方ができます。主は、私にこう導いて下さいました。初めに、父なる神が仰るのは、人の子に関することで「御名の栄光を現す」神は、ご自身と御子が一つであることをもう一度確認しておられます。それはすべて聖書の中に、さりげなく、でもそこにあるんです。御父と御子は一つです。この過去形で表されたイエスの栄光の御名は、イエスの誕生と現在の働きについて語られただけでなく、またそれは、神のアルファ（第一番）の状態、つまり御父と共に始まることを語っていて、”特定の/その”初めに、ではなく、初めから。いつも、常にという意味です。ヨハネの福音書 17 章 5 節に記されています。神の御言葉をお読みします。イエスが語っています。—いや、むしろこれが本当の主の祈りですーイエスはこの言葉を発しておられます。

ヨハネ　17

5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。

つまりイエスの御名は初めから讃えられていたのです。聖書に「ことば」は永遠の初めから神とともにあったと記されているからです。（ヨハネ　1：1 参照）

常にあったから、始まりなどなく、また、神の御国に終わりがありません。これはメッセージ中のメッセージであり、28 節の御言葉とよくマッチしています。神のご宣言が、過去形から未来形へとなるにつれて、神は「わたしは再び栄光を現そう。」と仰います。その出来事は、十字架でクライマックスを迎えます。しかしまた、主の再臨、千年王国の統治、そして永遠について語っています。主の御名が、栄光をもたらすのです。それだけでなく、誰も知らない別の御名前になるのです。黙示録の 19 章 12 節に、イエス・キリストの再臨に関する御言葉があります。

黙示録　19

12 その目は燃える炎のようであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。

この記述について考えてみましょう。「神以外には、誰も知らない名前が書かれていた。と言うこともできたはずです。それについて考えてみてください。そうすれば、状況は変わるのではないですか？　皆さん、ついて来てますか？「”ご自分の”ほかはだれも知らない名」と書かれてます。どういう意味でしょうか？　ご自分とは誰ですか？　ー神です。捉えにくいですが、ここに確かにあります。ですから、これを全体的に見ると、イエスが、昔も今もおられ、そして、これから来られるということがわかりますすべてが一体となっているのです。主は栄光を帯びて来られ、栄光のために死ぬことを望む者は皆、主とともにあるのです。私たちは、主に従うよう召されており、こんにち、栄光のために死ねば、その栄光の日に与かれるのです。神は語られましたが、本文の 29-30 節には、次のような御言葉が記されています。

ヨハネ　12

29 そばに立っていてそれを聞いた群衆は、「雷が鳴ったのだ」と言った。ほかの人々は、「御使いがあの

方に話しかけたのだ」と言った。」
30 イエスは答えられた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためです。」
お～面白くなってきました。御言葉は深遠ですよね？　この２つの節から、そばで聞いていた人々の状態について、非常に多くのことが分かります。また、イエスが、祈りを聞いてくださる父なる神に対して抱いていた確信もここに示していて、その両方がここに見られます。29 節から書かれていることを額面通りに受け取れば、ここには少なくとも、２つのグループの人々がいて、両者が、イエスに語りかけた声が誰なのか、何なのかが理解出来なかったのが分かりますね。本文を見てください。幾人かは、何かの雷のような音を聞きましたね？　一方、御使いかもしれない、と考える人もいました。さて、この２つの聴覚的な事象は、尋常なことではなかったと言ってよいでしょう。言ってみれば、毎日、どこででも起こるようなことではありませんでした。常軌を逸した出来事だったのです。それを頭に入れてください。特殊でした。しかし、人々は、それを理解も認識もしませんでした。イエス以外に、誰が分かりますか？　イエスの弟子たちです。イエスが弟子たちに、後で話したのだと言う学者もいますが、１つ確かなことは、彼らは少なくともそれが神から出たものだと分かっていたということです。彼らは分かっていたと思います。この聖書の中に収められています。私は、彼らが理解していたと信じます。なぜ彼らが理解していたと思うのかを説明します。30 節について考えてみてください。
ヨハネ　12
30 イエスは答えられた。「この声が聞こえたのは、わたしのためではなく、あなたがたのためです。
これは重要な宣言です。イエスのこの宣言の意味するところは、もっと深いものがあります。考えてみてください。イエスの魂は悩み、すぐに御父に祈られました。祈りは直ちに、神の御声によって答えられました。なぜなら、その願いは、神の御名の栄光を現すことであったからです。ここで、イエスは、その御声は、ご自分のためではなかったと仰います。なぜ？　父と子の間でその確認が必要ではなかったからです。イエスはもう分かっておられました。それ（栄光）がイエスに戻り、御父と一つになる。真の生ける神とそのような親密さを持つことは、明確な利点があります。それは、彼らが理解していなくても、彼らのためだったのです。彼らのためだったのです。それは、私たちには愛に満ちた神がいらっしゃるということですね。彼らにとってのサインです。彼らはサインにどう反応したのでしょうか？　さて、この節からは、いくつかの収穫がありました。皆さん、私について来て下さっていると確信しています。そして、先ほど読んだ箇所の順番に、いくつかの鋭い質問をし、それに答えていこうと思います。
最初の質問：そばにいた人たちは、なぜ天からの声をはっきりと理解できなかったのか？
答え：とてもシンプルに、それは、霊的な事象だったからです。
霊的な事象を理解するためには、それを聞く霊的な心が必要です。この人たちは、肉的にしか見えなかったのでしょう。というのも、少なくとも、御使いだと思った人がいたということは、彼らが神を知っている、あるいは神のことを知っていることを示しているからです。そして、この箇所を読み進めると、多くの人が御言葉を知っていた、あるいは、少なくとも御言葉を聞いていたことがわかります。しかし、何かが足りなかったのです。彼らは神の御霊で行動するのではなく、肉の感覚だけで動いていたのです。これは私にとって、心の問題であり、信仰の問題であり、神との関係の問題でした。「耳のある者は聞きなさい。」彼らはそのような耳を持っていなかったようですし、それを気にしていたようにも見えません。少なくとも本文には出てきません、それが次の質問につながっています。イエスが「声はあなたがたのためです」と仰ったとき、なぜ誰もイエスにその理由を聞かなかったのでしょうか？　なぜ、私たちのためだ

ったのでしょうか？　答えは簡単です。第一コリント人への手紙 2 章 14 節お読みします。
Ｉコリント 2
14 生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができないのです。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。
つまり、これは基本的に同じ答えですが、神の御言葉によってよりよく定義されているのです。そして、もし彼らがそれを愚かだと思わなかったのなら…、明らかに質問するほど重要だとは思わなかったのでしょうが、少なくとも御使いだと思った人たちは、質問すべきだったのです。分かりますか？　誰かがこう言ったと思うでしょう。「おい、今の聞いたか？」「ああ、御使いだったと思うよ。御使いが何と言ったのか、イエスに聞いてみよう！」そうでしょ？　しかし、聖書に書かれていないことを根拠に、それを追求するほどの感動はなかったのだと判断するのが正しいでしょう。彼らはただ、それが何であるかを推測したり、自分たちの間で話したり、もしかしたら他の人たちを説得するほどしか感動しなかったのです。それは、今も世が続けていることではありませんか？　考えてみてください。神の御言葉のこととなると、人々はどうしますか？　読まないのです。そうすると、「これは本当に書かれていたことではない」と。そうですね？　そして悲しいことに、彼らの多くが「元信者」あるいは「信仰を捨てた」と主張しているのです。さて、信仰を捨てたと言う人たちに、神の御言葉の権威に基づいて、一人一人にお知らせしておきましょう。そもそも信仰など持っていなかったのです。[会衆：アーメン　]
100 年かかったとしても彼らは信仰を持つことがなかったのです。そんなこと言わせてはいけません。これらの歌を歌っている人たちがいて、アルバムで 500 万ドル儲けた後に信仰を捨てたと言うのですから。はい？！　彼らは一人残らず偽の改宗者なのです。「私は信仰を捨てた」？「だから私は神にはなれなかった。」ああ、主よ…！ー（笑）ー「ほらイエス、あなたの救いを…」シューッ！　救いを返そうとしてます。いいえ、取り除くだけです。「捨てる」と口から出す前に…シューッ！！　消えるだけです。ー（笑）ー　肉的な話です、申し訳ないです言ってみただけです。それは愚かな発言であり、多くの人が受け入れているのです。救いは贈り物なのです。彼らはイエスを決して知りませんでした。決して。遊んでいたのです。それだけのことだったのです。そして、多くの人を巻き込みます。悲しいことです。だから、神の御言葉の権威に基づいて、誰かが「彼らはイエスを知らなかった」と言うのを聞くとき、それは主に…何て言えばいいんでしょう…気をつけないといけません。メモにはありません。だから、主は彼らに「わたしはあなたを知らない 」と仰られるのです。
さて、本題に戻ります。この記述がヨハネの福音書に収められている以外に、なぜ私は、弟子たちがその声が神の御声だと理解したと固く信じているのか？　それは、このためです。イエスは仰っています、
「わたしの羊たちはわたしの声を聞き分けます。わたしもその羊たちを知っており、彼らはわたしについて来ます。」（ヨハネ 10:27）
だから、私は信じているのです。主と御父とは一つである、それが理由です。さて、本文の 31-33 節をお読みします。イエスは宣言されます。
ヨハネ 12
31「今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。
イエスは宣言されます。
32 わたしが地上から上げられるとき、わたしはすべての人を自分のもとに引き寄せます。」
33 これは、ご自分がどのような死に方で死ぬことになるかを示して、言われたのである。

この 31 節では、イエスは世界に対する裁きを宣告されています。さて、これは神にしかお出来にならないことです。イエスが本当に神であられることを、再び主張し、論証しています。そして、イエスはまた、この世界の現在の支配者が追い出されることを確認し、少なくとも皆に知らせられたのです。私にとっては、これもまた会話の話題になるべき発言です。「この世の支配者が追い出されるのですか？　何を言っているのですか？」つまり、その裁きだけでも会話が弾むはずなのに、この世の支配者が…？　彼らは気にする様子はありません。この世の裁きは来ようとしています。支配者は追い出される用意がされ続けています。それは進行中であり、私たちは皆、それを知っています。しかし、彼らと同じように、多くの人は気にしていないようです。彼らはこの世に訪れる裁きに関心がないばかりか、裁く方が誰なのかにも関心がないのです。それは問題ですね。そして、この疑問に関して考えるとき…「この世の支配者は誰なのか？」考えてみてください。なぜなら、世の支配者が神でないとすれば、それは誰なのか？　サタンです。多くのクリスチャンは、「何を言ってるんだ？」という感じです。聖書が教えてくれています。これは作り話ではありません。完全に理にかなっています。世は、あらゆることが奪われています。なぜかって？　サタンが支配しているからです。あなたは人々がこう言うと思うでしょう。
「おぉ、マジか？サタンが支配しているのか？どうやったらここから出られるんだ？」いい質問。　ー（ 笑）ー　いい質問です。それが彼らの反応であるべきでした。そして、今の世の中を見れば、世の人々もそのように反応するだろうと思うでしょう。今は、特にコロナのおかげで、そうなっている人もいます。しかし、今、物事が落ち着いているので…おっと…「信仰を捨てました！」っていうのが出てくるのでしょうか？　一度も信仰を持ったことがないのです。もし、今の世界がイエスによって支配されていないのなら、なぜ私たちクリスチャンは今の支配者に従いたいと思うのでしょうか。特に、それが嘘の父であり初めからの殺人者、サタン自身だと分かっているのですから。ここに留まることを望むのですか？本当ですか？　つまり、この世界を救おうとするのは、もうやめましょう。その代わりに、魂の救いのために、天の恩恵を祈りましょう。だからといって、主が来られるまでの間、私たちはきちんと従事しないということではありません。そうです、私たちはできるうちにできる限りのことをするのです。しかし私たちは、神が何をされたか、神が何をしておられるか、神がこの先何をなさろうとしておられるかを理解する必要があります。そうすれば、この地球を救うために戦おうとするのではなく、私たち全員が良い戦いをするために正しい状態でいることができるでしょう。私たちはどうしたのでしょうか？　あなたの戦いの様子を教えてください。もし、これがわかれば、より楽になるはずです。特に終わりを知ると、ストレスがなくなるんです。32-33 節の本文に戻ります。イエスはここで、人の子が死に、その死によって、すべての民がイエスのもとに引き寄せられると語っておられます。さて、これからイエスの発言に対する彼らの反応について話しますが、その前に、イエス・キリストの死後、私たちが世界で見てきたことに注目したいと思います。さて、これからイエスの発言に対する彼らの反応について話しますが、その前に、イエス・キリストの死後、私たちが世界で見てきたことに注目したいと思います。この地球の表面を歩いたことのある人で、またこれから先に歩く人の中で、すべての人々をご自分に引き寄せることのできる方、それはイエス以外にはおられないのです。北から南、東から西まで、富める者から貧しい者、教育を受けた者から文盲の者まで、すべての人々が主のもとに引き寄せられるのです。世界で最も話題になっている神の人です。主の御言葉は、世界で最も流通している言葉です。あらゆる民族の背景、主は、聞こうとするすべての人に、あらゆる障壁を打ち砕かれます。これがイエスです！　差別なく、イエス・キリストはすべての人のために死なれました。そして、これはイエスの御言葉であり、イエスの御言葉は

決して過ぎ去ることはありません。この世界は、過ぎ去ります。天は巻物のように巻き上げられます。それについて考えてみてください。しかし、主の御言葉は決して過ぎ去ることはありません。これは信じられない、あれは信じないという人のために言っておくと、「御言葉は決して過ぎ去ることがない」と書かれているのです。[会衆]：主をたたえます！ハレルヤ！　遠慮なくどうぞ、主をたたえます！ー[拍手]ーそして、イエスがご自分の死を意味するために「地上から上げられる」と仰られたのも、どのように死なれるかを意味するものでした。主は謙遜に、しかし高貴に、最も屈辱的な死に方で、死に至るまで従順いう最も名誉ある行為で上げられるのです。私たち一人一人のクリスチャンが、キリストにあって死に至るまで御父に従順でなければならないのです。なぜなら、御父への従順さにおいて、私たちは皆、栄光のために、死んでいくはずだからです。

さて、本文の最終節です。これは、イエスがおっしゃったことに対する応答です。そして、イエスがどのように死なれるか、上げられるかについて語ったことについて、人々はこのように言うのです。34 節をもう一度お読みます。

ヨハネ１２

３４そこで、群衆はイエスに答えた。『私たちは律法によって、キリストはいつまでも生きると聞きましたが、あなたはどうして、人の子は上げられなければならないと言われるのですか。その人の子とはだれですか。』

ここで注目してほしいのは、彼らはキリストが永遠に生きることを律法から聞いていたことです。キリストの王国は確かに永遠に続くのです。終わりはありません。しかし問題は、この律法から聞いたことだけで誤って解釈され、それが預言者からの御霊の声を聞く耳を塞いでしまったことです。預言者たちはすでにこのことを語っていましたが、彼らが聞いたのは、律法からでした。もし、聖霊の力によって語った預言者たちから聞いていたなら、キリストが来られ、死に、苦しまなければならないことを知ることができたでしょう。また、旧約聖書の律法にも、メシア（救い主）が永遠に生きるという記録がないのは驚くべきところです。実際、預言者ダニエルは 9 章 26 節で、「メシアは断たれる 」と言っています。ついてきてますか？　メシアは断たれるのです。それは数ある箇所のうちの一つです。どうやら、彼らはイエスをイスラエルの王として敬っているだけで、別のメシアを探すように教えられたようなのです。そして当時、十字架刑という処刑方法が身近にあったのですから、人々に神の御言葉を教える人たちは、そのことを結びつけて考えていたのではないでしょうか。ああ、預言者の時代には話しても理解できなかったかもしれませんが、今、彼らはそれを見ているのです。「ああ、それ読みました。これってもしかして…？」彼らは何を読んでいたのでしょうか？　見落としていたのか、認めたくなかったのか、どちらかでしょう。そして、その理由は数多く考えられます。悲しいことに、それは今も続いているのです。考えてみてください。神の御言葉のすべてを語り、羊飼いとして働くべき人々がいますが、彼らは何をしているのでしょうか。彼らは別のイエスについて教えているのです。それが彼らのしていることです。感情的に盛り上げたい繁栄の教師、55 分のプログラムと 5 分の説教の教会とか。私たちがクリスチャンだと言いながらやっていることすべてを考えてみてください。私たちは 2 時間 30 分の映画を見るのに、おしっこをするために立ち上がることもなく、問題なく座ることができるのです。でも、1 時間の説教は？「ああ、まいったね。」ー（笑）ー　あれ？　本文 34 節では、律法を聞いた人たちがいました。そして、教会に関しても今日のテーマでいけば、会衆席の人たちは、御言葉を聞いている人たちだと言えるでしょう。しかし、問題は「どんな言葉を聞いているか」です。そして、あなたが聞いている言葉が神の御言葉であると、

どうしてわかるのでしょうか。
答え： 自分自身で聖書を調べなさい。
使徒の働き 17 章 11 節。ベレア人になりなさい。私の言うことを信じてはいけません。私は、自分が十分な注意を払っていると思いたいです。しかし、自分で調べることです。これは、指導者を信頼していないこととは関係ありません。神を信頼することと関係があるのです。ベレアの人々が何をしたのか、御言葉が教えてくれています。彼らは聖書を調べました。毎日、そのことが本当かどうか確かめていたのです。毎週でさえ、調べているでしょうか？　毎月？　半期に一度？　考えてみてください。悲しいことですが、こんにちの教会の大多数は、神の御言葉のすべてを教えていないのです。彼らは聖句を捻じ曲げ、真実を半分だけ話し、それは嘘以外の何物でもないのです。面白いことに、私がよく言っていたことをそのまま言うわけではありませんが、これは私が主と共に歩むずっと前のことです。でも、要点はわかっていただけるでしょう。軍隊で働くと、ある種の進化を遂げる際に詳細が必要になります。そして、誰かが話していることに耳を傾けなければなりません。99%は正しいのに、その中に 1 つの小さなウンチが…、ああ、それは 99.9%嘘で、間違った情報なんです。100%が欲しいなら、自分で聖書を見てください。神以外には頼らないでください。もし、あなたが自分で聖書に触れないと決めているなら、牧師に頼っていて、この人、あの人 、この番組、この記事、あれこれに頼っていて、聖書そのものに触れていないなら、時がきて、御言葉があなたに語られた時、あなたは、「人の子とはだれですか？」と言うでしょう。「聞いた話と違います。」「それは、律法で教えられたものではありません。」これが問題です。この人の子が誰なのか、教えてあげましょう。この神の子は、栄光のために死なれ、私たち一人ひとりに同じことをするよう招いておられるのです。私たちは皆、永遠に生きるために、真の生ける神と和解しなければなりません。そのためには、神の栄光のために自己に死ぬという痛みを伴うプロセスが必要なのです。神は、簡単だとは仰っていません。主はその価値があると約束してくださったのです。これが唯一の道であり、神は私たちが神と和解することを望んでおられるのです。そしてそれは、イエス・キリストの良い知らせによって実現することができるのです。
イエス・キリストの福音とは、キリストが聖書に従って私たちの罪のために死なれ、葬られ、聖書に従って三日目によみがえられたことです。救われるためには、ABC のようにシンプルで、まず自分が罪びとであることを認めることです。（A＝Acknowledge/認める）私たちは皆、イエス・キリストに他ならない救い主を必要としているのです。
ローマ人への手紙 3 章 10 節にはこうあります。
「次のように書いてあるとおりです。『義人はいない。一人もいない。』」
そして 23 節にはこうあります。
「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、」
分かりますか？　ついて来ていますか？　つまり、どんなことをしても、救いがなければ、誰も神の国に入ることはできないのです。そして、それは 6 章 23 節に示されています。聖書にこう書かれています。「罪の報酬は…」報酬…、それは獲得することです。分かりますか？　報酬を得るのです。仕事に行くということは、報酬のために働くということです。
「罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、（ああ、ここに賜り物があります）私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。」（ローマ 6:23）

そして、それが A です。
B は believe の略で、とても重大なものです。そこで登場するのが、あの偽信仰者たちです。彼らはそもそも信じていないのです。彼らは、イエスという考えを愛しているのです。たむろするのは格好いいけど、彼らは決して信じなかったのです。
そして、C は Confess/口で告白するの略です。この 2 つはローマ人への手紙にも登場します。この 2 つはローマ人への手紙にも登場します。10 章 9～10 節、お読みします。
「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。」（ローマ 10:9）
「人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。」（ローマ 10:10）
信じて告白するとき、私たちは自分の罪に対して死に、栄光のうちによみがえるのです。これが起こるのです。そして、この約束は、選ぶことを望むすべての人への贈り物です。神の御言葉は、**ペテロの手紙第二 3 章 9 節**で具体的にこう仰っています。
「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」
この無償の贈り物を断ってはなりません。罪の報酬は死です。私たちは皆、この邪悪な人生の死と引き換えに、永遠のいのちの栄光を選ぼうではありませんか。カポノ、歌で私たちを祝福してください。お立ちください、祈りましょう。
愛する天のお父様、もう一度、心から感謝します。あなたの御言葉は素晴らしいです。純粋で、とても聖いものです。主よ、私が正しく対処したことを祈ります。ここにいるあなたのしもべたち全員に、慈悲深くあられますよう、お願いします。私たちにあなたの御声を聞く耳をさらに与え、この無償の贈り物を受け入れる心を、これまでなかった方法でお与えください。ただあなたへの愛が再燃し、それを外の人々に向かって発揮でき、あなたが私たちの中に生き、あなたの栄光のために死ぬことを、人々に示すことができるようにさせてください。今日、ここであなたが成し遂げてくださったすべてのことに感謝します。
私たちがこの一週間、これからの数年間を通して、それを持ち続けることができるようにと祈ります。私たちはあなたを愛し、あなたを賛美します。イェシュア、イエス・キリストの力強い御名によって祈ります。アーメン。

メッセージ by JD Farag 牧師カルバリーチャペルカネオヘ
http://www.calvarychapelkaneohe.com/
Calvary Chapel Kaneohe47-525Kamehameha Hwy. Kaneohe, Hawaii　　筆記 hukuinn7